

令和6年度 金光藤蔭高等学校 学校評価報告書

1 めざす学校像

建学精神	：我々が天地の大徳によって生かされ、家族をはじめ多くの人々の祈りによって育てられていることの自覚と感謝の念から発して、その自分を大切に、将来世のお役に立つ人間となって、世界真の平和達成と文化の発展のために貢献し、そこに生甲斐と喜びとを見出す人でありたいという念願に立って、教育の徹底を期する。
教育理念	：「人間平等」・「個性尊重」・「心を育む」を柱に、情操教育（4つの力を育てる）を推進する （4つの力）道徳的価値を養う教育／命の尊さを学ぶ宗教的教育／美的センスを育てる教育／自ら考える力を養う教育
教育目標	：①基本的生活習慣の確立 ②高い規範意識と社会に通ずる礼節を身につけさせる ③個を伸ばす指導

2 中期的目標

1 法人理念の徹底と教育理念の浸透	3 学校組織活動の充実発展
(1) 法人理念の徹底	(1) 学校組織の活性化
(2) 教育理念の浸透	(2) 業務を通じた人材育成
2 教育内容の充実／改善	(3) 教職員研修の実施
(1) 新コースの充実	4 広報募集活動
「スタンダード」「エンカレッジ」「アートアニメーション」「トップアスリート」	(1) 広報活動の充実強化⇒メディアプロモーション※1
(2) 基礎学力の定着⇒「学びなおし」⇒「学びたいむ」の取り組み	※1 (PV・学校案内・オープンスクール・入試説明会・インスタグラム・ホームページ)
(3) 生徒指導の充実	(2) TOIN QUESTの実施
(4) 進路指導の充実	5 創立100周年に向けて
(5) 令和7年度からの新たな改編に向けた検討	(1) 学園本部組織を受けて校内体制の構築

【自己評価の結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価の結果と分析	
【アンケート】	
○生徒・保護者＜令和7年2・3月実施＞授業内容を中心に学校生活全般について調査した。（保護者15項目、生徒15項目）	
○教職員＜令和7年4月実施＞授業評価・生活指導・学校改革の成果について検証した。（15項目）	
【分析】	
○生徒・保護者アンケートではほとんどの項目で約80%以上の生徒が肯定的な意見を示している。	
○教職員による自己評価では、「各コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」と99%の教職員が実感している。また「課題を抱える生徒について担任・学年・教育支援・生徒部・スクールカウンセラーが連携し組織的に丁寧に取り組んでいる」の項目でも約100%の教職員が共感し実践している。今後も一人一人の生徒に寄り添った、丁寧な教科指導、生活指導を継続していきたい。	
学校評価委員会からの意見（学校評価委員会：5月9日実施）	
学校評価委員 ①学識経験者：比嘉 悟氏（近畿医療専門学校 副校長 前桃山学院教育大学 副学長） ②本校PTA会長：向畑 志津枝氏 ③地域防災委員長：新居見 英夫	
1 法人の理念と教育理念の浸透	3 学校組織活動の充実発展
(1) 法人の理念の徹底	(1) 学校組織の活性化
(ア)建学の精神の徹底については、生徒70%・保護者の89%が心の教育を理解している。保護者が89%理解しているのは素晴らしい。(イ)70%の生徒が学校行事として	(ア)準専任教員選考には13名の常勤講師が臨み、4名を任用した。
(2) 教育理念の浸透	(2) 業務を通じた人材育成
(ア)100%の教員が情操教育の実践に取り組んでいる。	(ア)新任の常勤講師を対象に研修を充実させ、学年部長や分掌長が中心となり学級経営、生活・学習、学校業務に関する細かい指導を行った。(イ)ベテラン・若手が協力して課題解決と新しい取り組みにチャレンジしているかの項目に教員の80%がその取り組みを認識している。
2 教育内容の充実と改善	(3) 教員研修の実施
(1) 新コースの充実：(ア)スタンダードコースは3クラス(110名)編成でスタート(イ)エンカレッジコースは「学びなおし」を募集のコンセプトに入れることで、入学者数の繋がっている(ウ)アニメーションコースは目的意識を持った生徒を確保し、3年生は提携校の大阪アニメーション専門学校に6名進学。(エ)トップアスリートコースは柔道部個人2名がインターハイに出場。団体・個人1名が選手権大会に出場 女子ソフト部は4年連続インターハイ出場・近畿大会出場 男子バスケット部はインターハイ予選ベスト16・ウインターカップ予選ベスト16 女子バスケット部インターハイ予選ベスト16 陸上部はインターハイ予選女子予選800準決勝2名進出 トップアスリートコース入学者は126名4クラス編成を確保できた。	(ア)宗務課については横山勇喜雄先生（金光教官会 副会長）をお招きし「建学の精神に基づき取り組んだこと」をテーマに講演していただいた。(イ)入試広報「学校PR」研修については、全教職員によるグループワークショップ（KJ法）による本校のPRポイント・合言葉・スローガンを選出した。
(2) 基礎学力の定着と向上 (ア)基礎学力の定着を目指し、前期(4月～9月)において国語・数学・英語の「学びなおし」授業を実施(イ)自学自習サポート教室（藤蔭塾）も大学院生のサポートのお陰で生徒達に学習意欲を高めることができた。(ウ)令和6年度は積極的に公開授業を実施することができた。(エ)放課後に実施した進学講習・特別講習を受講した生徒がその内容に全員が満足している。(オ)生徒による授業評価アンケートでは「授業はわかりやすく工夫されているか」との質問に90%満足していると保護者が回答。教員の授業の取り組み方は令和6年度も評価されている。	4 広報募集活動の充実強化
(3) 生徒指導の充実 (ア)転退学率は4.5%と5%以下の目標を達成できた。(イ)全体指導案件は22件から25件と微増した。保護者と連携のもと事案を未然に防ぐよう指導してほしい。(ウ)人権侵害事象ゼロは昨年同様誇れる事である。(エ)95%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行なっている。」は評価できる。	(1) 広報活動の充実強化
(4) 進路指導の充実 (ア)令和6年度の全体の進学率は昨年度の80.0%から81.8%と増加した(イ)進学希望者の中で未決定率は浪人希望を含め0.8%、就職希望者の中で就職内定率96.6%は評価できる。	(ア)本校の特化した学びの魅力をより伝えるために中学生・保護者対象のオープンスクールを例年の4回から3回とし、全日・回遊型広報行事1回を追加。また、エンカレッジコース対象の個別相談会を2回実施した。(相談者数199名)オープンスクールの参加数は昨年度から31名減の744名であった。(イ)新入生304名は達成する事ができた。新入生が304名となったのは、大きく評価できる。教職員全員の取り組みの評価である。
(5) 令和7年度からの新たな改編に向けた検討 (ア)令和6年度の改編については年32単位から30単位へと変更し、土曜日は自由登校日とした。(イ)土曜日の自由登校日については各コースの取り組みを中心に多様な講座を設ける。ニーズにあった幅広い活動など新しい取り組みを取り入れたのは評価できる。	(2) TOIN QUESTの実施 (ア)回遊型の広報行事を行った。ニーズは高いので、次年度はブラッシュアップした上で2回実施する予定である。幅広い広報活動など新しい取り組みを取り入れたのは評価できる。
	5 創立100周年に向けて
	(1) 学園本部組織を受けて校内体制の構築
	(ア)若手・中堅の教職員の意見・アイデアを取り入れ本校の5年後・10年後の希望に向けたビジョン・目標に向けた話し合いの実施。一人ひとりの生徒に誠実に真摯に向き合い、教職員が魅力ある学校づくりのために、日々研鑽しチャレンジできる環境を整えている。
	金光藤蔭高等学校は、近年、校長をはじめ、教職員の懸命な努力で、生徒のために学校が年々進化しているように見える。入学する生徒も保護者も先生方の努力をよく把握し理解している。今後益々、生徒から人気の高い魅力のある学校になっていくと確信している。

3 本年度の取組内容及び自己評価

目標 中期的	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
法人理念の徹底と 教育理念の浸透	(1) 法人理念の徹底 ア 建学精神の徹底 イ 金光教本部参拝及び学校での感謝祭 (2) 教育理念の浸透 ア 情操教育の実践	(1) 法人理念の徹底 ア 建学精神を全ての教育活動の基本として、教職員・生徒・保護者への啓発に努める。 イ 宗務課と調整のうえ、実施を検討する。 (2) 教育理念の浸透 ア 道徳的価値を養う、命の尊さを学ぶ、美的センスを養う、自ら考える力を養う教育を学校生活全般を通して意識し実践する。	ア 式典・行事をはじめ、学年・学級での指導を通じて、建学精神を理解させる。 イ 天地・人・物への感謝と、社会のお役に立つという「心の教育」を金光教本部参拝・感謝祭を通じて体現する。 ア HR・授業・課外活動や修学旅行・校外学習・コース別行事等を通じて、情操教育の実践を心がける。	ア 生徒70%・保護者89%が心の教育を実感していると認識している。式や行事の他、学年集会や日々のホームルームでの指導が生徒に浸透しているようである。 また昼休みや放課後、神徳堂(お広前)を訪れる生徒も多く、宗務課教員との対話を通して心の癒しを得ている生徒も多い。 イ 70%の生徒が学校行事として認識している。令和6年度は2年生代表生徒35名が本部参拝を実施することとなった。感謝祭・宗教の授業の中で「日々生かされている」「世のお役に立つ人間になる」ことへの意識喚起を促すことができた。感謝祭では参列した3年生全員が、感謝の気持ちをもって日々の学校生活を過ごす決意を新たにした。 ア 100%の教員が諸活動を通して、情操教育の実践に取り組んでいると認識している。
教育内容の充実改善「コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導」	(1) 新コースの充実 ア スタANDARD イ エンカレッジ ウ アートアニメーション エ トップアスリート	(1) コース内容の充実・検証 ア 令和6年度より新設。「あらゆる進路に対応できる」コースを目指し、総合的な探求の時間を通して、国・数・英の「学びなおし」+次年度からの分岐コース選択に向けたガイダンスを実施する。 イ エンカレッジについては、具申書・高校生活カードや入学前面談等を十分活用して、個別教育支援計画の作成等を丁寧に行う。生徒・保護者との連携を密にし、「学びなおし+体験」を実施する。 ウ アートアニメーションについては、既存の商業美術的アニメ制作の域を超え、「デジタル制作の幅を広げる」ことを目的に展開していく。 カ 「陸上競技部」が加わり、7クラブ体制となり、大幅に在籍が増えた。競技力の向上はもとより、礼儀・挨拶にはじまり、学校を牽引するコースとなるような教育実践を行う。	ア 2年次からの、「調理・理美容」、「探求」、「IT」、「特進」の分岐コースをより選択しやすい授業展開を行う。 イ エンカレッジ生徒の出席状況の改善、満足度の向上を図る。また、2年次からの転コースも可能とする。 ウ 制作の喜びを味わうことのできる内容、総合的なプレゼンテーション能力の向上を図る。 エ 全国大会・ブロック大会への出場と生徒募集の拡大、進路指導の充実を目指す。	ア スタANDARDコース初年度は4クラス(120名)編成を目標にしたが、3クラス(110名)編成でのスタートとなった。時代の流れに沿った更なるカリキュラム改編・講座の充実を図りたい。 イ エンカレッジコース開設8年目、「学びなおし」を募集のコンセプトに入れることで、入学者数の安定に繋がっている。 入学前面談実施や個別教育支援計画の作成に力を入れ、担任・学年が中心となって粘り強い取り組みを実施し83%が進級できた。3年生は42名全員が卒業し、39名が進学した。 ウ アートアニメーションコースは目的意識をはっきり持った生徒を確保している。3年生は提携校である大阪アニメーションカレッジ専門学校へ6名が進学した。その他、美術系やイラスト・声優分野の大学へ多く進学した。 エ トップアスリートコースは、柔道部の個人2名がインターハイ出場、個人1名が全日本ジュニア出場。団体・個人1名が選手権大会出場、近畿大会(団体・個人5名)に出場した。 女子ソフトボールは4年連続インターハイ出場・ベスト8をはじめ全国選抜大会・近畿大会に出場。 男子バスケットボール部はインターハイ予選ベスト16・WINTER CUP予選ベスト16。 女子バスケットボール部は、インターハイ予選ベスト16・WINTER CUP予選ベスト16。 創部1年目の陸上競技部は、インターハイ予選女子800m準決勝2名が進出。大阪総体において男子1500m6位入賞1名、女子800m8位入賞1名。 令和7年度トップアスリートコース入学生は126名・4クラス編成となり昨年度同様に多数の入学生を確保できた。

	<p>(2)基礎学力の定着と向上</p> <p>ア 「学びなおし」の取り組み</p> <p>イ 「学びたいむ」の実施</p> <p>ウ 「藤蔭塾」の開設</p> <p>エ 公開授業の実施</p> <p>オ 進学講習の実施</p> <p>カ 生徒による授業評価</p>	<p>(2)基礎学力の定着と向上</p> <p>在籍者全体の基礎的学力の定着と、進学希望生徒の学力アップ</p> <p>ア 1年次「総合的な探求の時間」でのまなびなおし</p> <p>イ 週4日、放課後の25分間を利用して、幅広い分野の学習を行う。</p> <p>ウ 放課後の図書室の一角を開放し、奈良女子大学の学生による自学自習のサポートを行う。</p> <p>エ 授業改善・授業力向上に向けて研究授業を実施する。</p> <p>オ 全コース対象に、3年次放課後に大学進学講習を実施する。</p> <p>カ 生徒による授業評価を授業改善に活かす。</p>	<p>ア 基礎学力の定着を目指す。</p> <p>イ 担任による、一般常識など知識を広げる学習を目指す。</p> <p>ウ 生徒の自主的な学習習慣をサポートする。</p> <p>エ 公開授業を年間2回の期間を設けて実施する。</p> <p>オ 希望する大学への合格を実現する。</p> <p>カ 教諭・常勤講師全員が生徒による授業評価を実施して分析する。</p>	<p>ア 基礎学力の定着を目指し、前期(4月～9月)において国語・数学・英語の3教科で「学びなおし」授業を実施した。中学校の復習的な内容で授業を展開したが、クラスによって進捗の差がみられた。</p> <p>イ 「学びなおし委員会」を中心に視写を取り入れた学習の基礎をつくる取り組みを行った。次年度からは全学年で実施する。学年ごとに「学びなおし」教材を工夫し実践した。今後の課題として各クラス間でモチベーションの差異がないよう、担任間の連携を密にし、環境整備につとめたい。</p> <p>ウ 自学自習サポート教室(藤蔭塾)も大学院生のアシスタントによるきめ細かなサポートのおかげで、生徒たちの学習意欲を高めることができた。</p> <p>エ 令和6年度は積極的に実施することができ、各教科内でフィードバックをおこなった。</p> <p>オ 放課後に実施した進学講習・特別講習を受講した生徒の全員がその内容に満足している。</p> <p>カ アンケートでは「授業はわかりやすく、工夫がされているか」との質問に90%の生徒が満足としている。同じく「本校では基礎学力向上に向けて丁寧でわかりやすい授業を行っている」との質問に90%の保護者が満足していると回答している。しかし、科目別担当者によっては課題となる授業がみられたので、教科内で共有し教員一人一人の課題克服・授業改善につなげたい。</p>
<p>教育内容の充実改善「コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導」</p>	<p>(3)生徒指導の充実</p> <p>ア 生活習慣・学習習慣の確立</p> <p>イ 生徒間のトラブルや、SNS関連を含む生徒指導事案の防止</p> <p>ウ 課題を抱える生徒への対応</p> <p>エ 人権侵害事象の根絶</p> <p>オ 挨拶・マナー等の徹底</p>	<p>(3)生徒指導の充実</p> <p>生活習慣・学習習慣や自尊感情の醸成に力を入れて、出席状況や授業態度の改善に取り組む。</p> <p>ア 転退学者数の改善を継続して行う。「3年間お預かりして育てる」「社会のよき構成員として世に送り出す」という使命感を大切にする。</p> <p>イ 高校生らしい友達関係の構築が難しいケースがある。コミュニケーション能力を高め、望ましい対人関係を身に付けさせる。SNSの弊害や正しい使い方を教える。</p> <p>ウ 課題を抱える生徒への対応については、担任・学年を中心に、教務部(教育支援係)・生徒部・スクールカウンセラーが連携し、組織的に丁寧に取り組む。</p> <p>エ 道徳的価値観・命の尊さ・社会規範をしっかり理解させ、生徒間の人権侵害事象は起こさない。</p> <p>オ 学校内外のあらゆる場面における礼節(挨拶・礼儀・節度ある行動)を習慣化できるよう指導を徹底する。</p>	<p>ア 転退学者5パーセント以下を達成する。</p> <p>イ 指導事案の発生防止に繋がる日常の事前指導に重点を置く。</p> <p>ウ 学校への登校、進級・卒業に向けた幅広い学校生活のサポートを丁寧に行う。</p> <p>エ 人権侵害事象はゼロを目指す。</p> <p>望ましい服装・身だしなみや、礼節を徹底させる。</p>	<p>ア 転退学者数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度→33名(3.53%) 転学20退学13 ・令和4年度→62名(6.61%) 転学29退学33 ・令和5年度→55名(6.76%) 転学28退学27 ・令和6年度→36名(4.5%) 転学18退学18 <p>令和6年度の転退学率は4.5%と5%以下の目標を達成できた。転退学者の約90%は「不登校」を含む「学校生活学業不適応」や「進路変更」が理由であった。入学生の多くが小・中学時に家庭的、経済的、学習的に多くの課題を抱えている背景があることは否めない。生活習慣未確立や学習習慣のない生徒の自尊感情の醸成にさらに力を入れ、出席状況や授業態度の改善に取り組みたい。</p> <p>イ 全体の生徒指導案件は昨年の22件から25件と微増した。そのうちSNSの不適切な使用による事案が年々増加傾向にあり、HRや学年集会、保護者懇談会等で今後も注意をよびかけ、保護者との連携のもと事案を未然に防ぐように継続して指導していきたい。</p> <p>ウ 人権侵害事象はゼロであった。</p> <p>エ 95%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行なっている」と答えている。いろいろな場面での挨拶指導が浸透してきている。</p>

	<p>(4)進路指導の充実 ア 進学実績の向上 イ 望む職業への就労実現</p>	<p>(4)進路指導の充実 ア 大学・短大・専門系学校への進学実績を向上させる。 イ コロナ禍が続いたことで、現役高校生には非常に厳しい情勢ではあるが、卒業段階での未進学者・未就労者の数をできる限り減らすことを目標とする。</p>	<p>ア 四年制大学をはじめ進学者を前年度よりアップさせる。 イ 未進学者・未就労者を前年度より減らす。</p>	<p>ア 令和6年度の全体の進学率は昨年度80.0%から81.8%と増加した。大学進学率は昨年度の41.5%から47.9%へ増加し、専門学校進学率が35.5%から32.2%と減少した。大学合格者数の約40%が指定校推薦で、専門学校は78%が総合型(AO)であった。 イ 進学希望者の中での未決定率は浪人希望を含め0.8%、就職希望者の中で就職内定率は96.6%であった。その他の未決定者数は5名。進路未決定者ゼロを目指し、今後も粘り強い進路指導を継続していきたい。</p>
	<p>(5)令和7年度からの新たな改編に向けた検討 ア 「校時」の変更 イ 土曜授業の廃止</p>	<p>(5)生徒のニーズや本校の特性を活かした新たな改編へ向けた検討課題 ア 以下の変更について検討する。 1. 「DT (ダイバーズタイム)」の設置 2. 始業時間の変更 3. 50分 → 45分授業への変更 4. 年32単位 → 30単位への変更 イ 校時の変更・カリキュラムの変更に伴い、土曜日の運用については、「LHR」や「コースの取り組み」を行う。</p>	<p>ア 単に時間の短縮や授業数を減らすのではなく、本校の特性・個性を活かして、魅力ある学校づくりを実現する。 イ 授業数の均衡化と、活動的な取り組みを実施する。</p>	<p>ア 令和6年度の改編については、年32単位から30単位へと変更し、土曜日は自由登校日とした。今後も必要に応じて、他校の動向・世の中の流れを的確に掴み順次対応していきたい。 イ 土曜日の自由登校日については、各コースの取組を中心に多様な講座を設ける。その他、各種検定試験対策講座や1週間の勉強の遅れを取り戻す講座等を検討中である。</p>
<p>学校組織活動の充実発展</p>	<p>(1)学校組織の活性化</p>	<p>(1)学校組織の活性化 ア 組織的・機動的な学校体制の確立 教科指導やクラブ指導は専門性が必要、学年や分掌組織は組織力・機動力・実行力が必要である。それぞれが、連携を密に活発な業務活動を展開する。</p>	<p>ア 適性を配慮した人事配置を行う。 ア 将来を見据えた教員の採用を行う。</p>	<p>ア 準専任教員選考には13名の常勤講師が臨み、4名が任用となった。常勤講師は任期満了者に代わり、新規に4名を採用した。生徒の学習指導や教育活動に熱心に取り組む教員の採用に今後も全力を尽くす。</p>
	<p>(2)業務を通じた人材育成</p>	<p>(2)業務を通じた人材育成 ア 管理職や分掌組織の組織的業務を通して、5年後、10年後の担い手を育成する。 イ 課題抽出、発展的改編型の業務を展開し、ベテラン・若手が協力して課題解決と新しい取り組みにチャレンジする。</p>	<p>ア 管理職や校務運営委員会メンバーを中心に、重要な学校課題に向き合い業務を実践させる イ 教職員間のコミュニケーションとディスカッションを大切にする。</p>	<p>ア 新任の常勤講師を対象に研修を充実させ、学年部長や分掌長が中心となり学級経営、生活・学習、学校業務に関する細かい指導を行った。 イ ベテラン・若手が協力して課題解決と新しい取り組みにチャレンジしているかの項目に教員の80%がその取り組みを認識している。また管理職(教頭補佐)が様々な校内・校外研修を提示し、若手教員も積極的にそれに参加し、自己研鑽力を高めている。</p>
	<p>(3)教職員研修の実施</p>	<p>(3)積極的な教職員研修の実施 ア 今年度予定されている教職員研修 1. 金光教宗務課研修 2. 「ガン」研修 3. 生徒会リーダー養成研修 4. 支援教育研修 5. 教務システム研修 6. 入試広報「学校PR」研修 7. 緊急時(災害)における対応について</p>	<p>ア 教職員全員に浸透させ、共通認識・知識を持たせる。</p>	<p>ア 宗務課研修については、横山勇喜雄先生(金光教宮窪教会 副教会長)をお招きし「建学の精神に基づき取り組んだこと」をテーマに講演していただいた。 入試広報「学校PR」研修については、全教職員によるグループワークショップ(KJ法)により本校のPRポイント・合言葉・スローガンを選出した。 生徒会顧問によるリーダー養成研修において「クラスの結びつきを強めるワークショップ」を実施。生徒が様々なワークショップを体験する前に、教員自らが同様のワークショップを体験し、生徒と共に生徒の主体性・課題・問題を解決する力を養った。 その他、人権研修において「部落差別の現状と課題」～今 教育現場に求められること～をテーマに川端宏幸氏に講演をいただいた。 外部講師による「がん」研修については次年度に実施予定となった。</p>

広報募集活動の充実強化	(1) 広報活動の充実強化	(1) 組織的・多角的な入試広報活動の充実 ア 総務部（入試広報）の組織的な広報展開。 渉外担当者5名、教員担当者3名、事務室担当者1名が中心となり、広報活動の運営に当たる。 イ メディアプロモーションの拡大 1. 学校案内・ポスター制作 2. 入試説明会・オープンスクール企画 3. 個別相談会・中学説明会・塾長説明会 4. プロモーションビデオの制作 5. HP・Instagramの発信 （学校生活・行事・クラブ・食堂など） 6. ノベルティ制作 ウ 入学生徒の確保 本校の他にはない「特化したコース」による教育内容と、心の教育にもとづいた「面倒見の良い学校」をアピールし、中学生・保護者・中学校・塾から信頼を得るよう努力する。	ア オープンスクール・学校説明会・中学校対象説明会・塾長説明会・個別相談会・私学展等全般を通して、丁寧かつわかりやすい広報活動を行う。 イ 中学生・保護者向けに、魅力ある情報を発信しPRする。 ウ 令和7年度入試において、300名を超える入学者数を確保する。	ア 本校の特化した学びの魅力をより伝えるため中学生・保護者対象のオープンスクールを例年の4回から3回とし、全日・回遊型広報行事（TOIN QUEST）を加えて実施した。入試説明会は昨年同様に3回実施した。塾長対象・中学校教員向けの説明会もそれぞれ実施した。 またエンカレッジコース対象の個別相談会を2回実施した（相談者数199名）。 オープンスクール（434名）・入試説明会（309名）の参加生徒数は昨年度より31名減の744名であった。 イ 令和6年度は学校案内冊子の発行を早め、中学校への速やかな広報活動を開始した。 またホームページをはじめ公式Instagram・LINE・YouTube等を活用し、中学生や保護者によりわかりやすく親しみやすさをアピールし、学校行事等もタイムリーにアップするよう努めた。 ウ 新入生304名となり目標を達成することができた。令和7年度はスタンダードコースの充実・アートアニメーションコース・カリキュラムの改編を全面に中学校・塾にアピールし、広報活動の強化・充実を図りたい。
	(2) TOIN QUESTの実施	(2) 新しいオープンスクールの取り組み ア 従来の時間設定してのオープンスクールではなく、一日中いつでも好きな活動が体験できる取り組みを提供する。	ア 行きたい時間に、行きたい場所（体験）ができるよう実践し、より深く魅力をPRする。	ア 今年度初めて「TOIN QUEST」という名称で回遊型の広報行事を行った。（第4回OSのタイミングで実施） 昨年第4回OS、第1回入試説明会の参加者が少なかったが、今年度は「TOIN QUEST」参加者が非常に多かったことで、入試説明会への参加につながられた。 ニーズは高いと考えられるので、次年度はブラッシュアップした上で、回数を増やし、第1・第4回OSのタイミングで「TOIN QUEST」を、2回実施する予定である。
創立100周年に向けて	(1) 学園本部組織を受けて校内体制の構築	(1) 学園本部組織を受けて校内体制を構築 ア 令和8年（創立100周年）に向けて、教職員一人一人が将来の本校の姿を描きながら、日々の業務に向き合い、意識させるようにする。 イ 学園本部の組織に従い、校内の創立100周年記念事業に係る校内体制を構築する。 1. 記念祭（感謝祭）・物故者慰霊祭 2. 記念藤蔭祭 3. 記念体育大会 4. 記念芸術文化鑑賞 5. 記念講演 6. 記念誌制作	ア 大きな節目となる創立100周年に向けて、目的意識をもって業務に従事する。 イ 各行事に人員を配置し、令和8年実施に向けて計画・準備する。	ア 若手・中堅の教職員の意見・アイデアを取り入れながら本校の5年後・10年後の希望に満ちたビジョン・目標に向けた話し合い等の実施。 一人一人の生徒に誠実に真摯に向き合い、保護者との連携をさらに深め、教職員が魅力ある学校づくりのために日々研鑽しチャレンジできる環境を整えるようにする。